

# 授 業 研 究

～リズムから創作へ～

岡 本 雅 子

## 1. はじめに

幼児教育科1年生の1年間を通じて、豊かな身体表現能力をもった幼児教育者の育成を目標に教育実践を続けてきた。しかしながら、学生の経験、資質に関わる問題は年々変化、深刻化している。幼児教育科学生は、一般学生に比べると人と関わることにも積極的で、人前に立つことも厭わない学生が多い。しかし、人間関係の構築に躓く学生は年々増加しており、今後も増加の一途を辿るであろうことは、容易に予想ができる。又、なかには、人前で表現することはおろか、人前に立つことが嫌で思い悩む学生（後に進路変更）もいる。グループ活動の多い、実技・演習系の科目では、このような学生の資質の変化への対応を、余儀なくされており、内容・指導方法を変更してきた。一番大きな変更点は、今年度より1年半の実技指導が可能になったことである。これを契機に、今回は、ダンスの特性、学生の資質の変化など、身体表現を指導する際に大きな障壁となっていると思われる指導上の問題点を明らかにし、内容・指導方法の改善に資する資料として報告した。

## 2. 指導上の問題点

### 1) 学生の経験に関わる問題点

まず最初に、いわゆる「音・美・体」といわれる実技系分野に共通することであるが、短大就学以前における学生の経験の差が大きいという問題がある。「高校の選択科目で書道を選択し、音楽も美術も3年間習っていない」「高校にプールがなかったため、3年間水泳はやっていない」「たまたま自分を担当する体育科教員が男性ばかりだったので、ダンスはやらなかった」「武道とダンスが選択だったので、ダンスはやっていない」など、例を挙げればきりが無いが、これに個人的な習い事、所属クラブを範疇に入れると、初心者から上級者（限りなく少数であるが）が混在するのが実情である。

又、講義系科目に比べ、得意・不得意が授業の中で自分にも他人にも露呈してしまうことから、講義系科目における学力差よりも有能感・劣等感を感じやすい。従って、授業を受ける以前の、個人の過去の経験に基づいた好き嫌いの差が大きいという問題もある。

### 2) ダンスの特性に関わる問題点

ダンスは他の体育系種目に比べて、好き

嫌いが非常にはっきりとしており、ダンスが好きと答える者と嫌いと答える者に二分される。しかし、好きと答える者の9割近くは創作ダンスが好きと答えており、一度好きになれば、創作ダンスのように個の創造的な活動を好んでするようになる、という非常に両極端な二面性を持っている。Hip Hop ダンスのように、流行の音楽でリズムカルなダンスはやってみたいと思う者が多いことを踏まえると、ダンスを嫌いな者は、つまり創作ダンスが嫌いなのであり、ダンスを好きな者は創作ダンスが好きなのである。<sup>1)</sup>

創作ダンスが嫌いになる理由とも通じるが、音楽や美術と異なり、自分の身体を媒介とする表現であること自体が抵抗感につながっている。「恥ずかしい」「格好が悪い」「ダサイ」ことを非常に嫌う年頃でもあり、周囲の目を必要以上に気にする。つまり、自分のダンスがダサイと思われる＝自分がダサイと思われる、という図式なのである。このことが、ダンスをする、身体表現をする際の大きな抵抗感となっているのである。

従って、嫌いになると創造的活動に取り組むことの大きな壁になる為、抵抗感を取り除くための環境を整えることが必要である。

### 3) 学生の資質に関わる問題点

人間関係が希薄であり、人間関係を構築する力が不足している学生が多々おり、グループでダンス作品を創作したり、演出の工夫をする活動がスムーズに行えないという問題がある。一番気にかかっている点

は、活動以前のグループ作りが上手くできないことである。一学年3クラス中、昨年度も今年度も、2クラスが授業で指定した時間内にグループを作ることができなかった。特に、昨年度の2ケースは、(他人の嫌がる言動をするなどの)人付き合いの苦手な特定の学生が、自由にグループ分けをした場合に明らかにどこにも所属できないことが、事前に筆者にも学生達にも予測できたという特殊なケースで、6人前後のリーダー達が協議を重ねて折り合いをつけなければならなかった。

今後、人間関係の構築やグループ活動が苦手な学生が増えるということは容易に予想できるが、幼児教育科学生の多くが、保護者と教員間の連携、協力の中で子どもを保育するという、人間関係が非常に密な環境に就職することを踏まえると、人間関係、グループ活動を円滑にさせることは重要な問題である。

表現する抵抗感を取り除くことにも通じるが、自分を表現できる、さらけ出すことのできるグループ作り、クラスの雰囲気作りといった環境作りがこの点においても必要である。

### 4) 幼児教育・保育の現場で求められる技術

保育現場において、どのような場面でダンスを行うことが多いかという点、「朝の体操代わりに」「通常保育の中でのリズム遊び・表現遊びで」行われることもあれば、「運動会で」「生活発表会で」発表するという形で行われることもある。

又、それらは、「既存の流行の音楽とダンス」「先生方が子どもの好きな音楽に創

1) 日本体育学会東京支部第23回大会「創作ダンスにおける音楽の役割—イメージとの関わりを中心に—」平成8年3月

作したダンス」「子どもが自由に表現することを構成したもの」に分けられる。

つまり、「テレビで人気のダンスを覚えて指導する力」「自分で創作する力」「子どもの表現を引き出す力」の3つの指導技術が求められている。

### 3. 指導上の工夫点

#### (1) 自分を表現できる環境作り

##### ① できないことへの恐怖感を払拭する

得意・不得意が自分にも他人にも露呈してしまう。そして不得意で劣等感を感じる場合に、自分の身体が表現の媒介であることから、嫌いになりやすく抵抗感を強めることは上述したが、劣等感を感じさせないための取り組みとして以下のように試みた。

「今までにやったことがないことは、大人でもできない、できなくて当たり前」ということを理解させるために、最初の授業で、外国人が箸を使えない例などを挙げながら、足が二拍子、手が三拍子の簡単な動きをウォーミング・アップで行う。始めは足だけ、手だけを分けて行い（必ず全員ができる）、続いて合わせて行う。この場合、ほとんどの学生ができない。何度か繰り返すと徐々にできるようになるため、また、分けて行った際には全員ができるため、頭から難しいこと、できないこと、という先入観を持たせることがない。「簡単そうに見えても、初めてのことは本当にできないのだ」ということを、身体で実感させることをねらいとし、できないことへの恐怖感を払拭させるように心掛けた。

##### ② グループ作りの抵抗感を払拭する

人間関係の希薄さ、友達の輪が広がらないことに関しては以前に述べているが<sup>2)</sup>、ペアやグループを作る際に、仲良しの友人から離れられなくて、動けなくなる学生が年々増えていることを実感している。そこで、様々な方法でグループ作りをし、授業を通して、仲よしグループ以外の学生との交流を図らせるように工夫をした。下記は、今年度行ったグループ作りの方法である。

- ・グループ作りゲーム
- ・居住エリア別グループ
- ・血液型別グループ
- ・生まれ月別グループ
- ・背の順グループ（均等）
- ・背の順グループ（低いグループ→高いグループ）
- ・自由

最初に話をしたり仲良くなるのが出席番号の近い者であることを考慮し、出席番号順グループは敢えて行わなかった。始めに行ったグループ作りゲームでは（手をたたき数だけ集まる）、なるべく多くの人数がグループを作れないようにし、その学生たちは自己紹介をした（出身・趣味・特技・好きなもの・家のこと・他）。ゲームにすることにより、グループ作りの抵抗感を持たせないように工夫をした。また、居住エリア別グループは、通学友達を早く作らせるというねらいもあった。

学生の反応は、「普段話さない人と話せてよかった」という感想が多かった。二年生に関しても、一年次の1クラスから、二年次では1.5クラスになったことから、

2) 「心と身体をつなぐ試み」（『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第18号所収）2001年

一年生と同様に上記の方法でグループ作りを行った結果、「他のクラスの人と友達になれた」、また一年生と同様に「普段話さない人と話せてよかった」という感想が多かった。このことは、一年間学生生活を経てきても、普通の学生生活の中では、自力で友達の輪を広げることができない学生が、少なくないことを裏付けていると思われる。

### ③ 創作の抵抗感を払拭する

個人差はあるが、ダンスを創作することへの抵抗感は、グループ作りと同様に、非常に根強いと感じている。このことから、ダンス創作への抵抗感を軽減し、表現できる環境を作ることに加えて、動きのポキャブラリー不足を補う必要性を感じた。そこで、昨年、一昨年は「体育実技」の中でダンス作品を振り写しし、幾つかの動きのパターンを覚えると同時に、動き方（いわゆるテクニク）の指導を導入して行ったが、今年度は、A 静止画から動きへの変換、B 振り付けのアレンジ、C 映像から動きへの変換を導入として、又段階的な創作実践として行った。（(2) 技術から創造性重視へを参照）以下は、その説明である。

A は、Web 上に公開されているダンスの静止画（「お魚天国」を使用）を、実際の動きに変換する作業である。静止画から静止画へのプロセスが視覚情報として得られないため、動きのリズム、テンポ、つながりは、ある程度予測して創作する必要がある。また、静止画とその説明からイメージできない動きに関しても、創作しなければならない。曲は皆よく知っており、ダンスも観たことのある学生がおり、創作するためのイメージは浮かびやすかったよ

うである。

B では、ゼロからの創作は抵抗感があるので、子供向けに創作した作品「それゆけ！ひまわり組（とつとこハム太郎より）」を振り写しし、それをグループ毎にアレンジさせた。衣装（色や形をそろえる程度）・小道具（動物の耳やお面、飾りなど）・フォーメーションの工夫も行ったため、基は同じ振り付けでも、グループごとの個性を反映することができた。また、動きのアレンジは、前進を前後入れ替わりへなどのアレンジが多く、創作というよりもフォーメーションのための工夫と意識付けを行い、創作への抵抗感を軽減させた。これは、クラス内で発表会を行った。

C では、子どもに教えたい、或いは子どもが好きなダンスを映像から覚えて、グループで工夫をした。映像では、実際の動きとは左右が逆になるため、視覚情報を左右逆に変換する作業が必要になる。また、途中アップになるなど、全身の動きがわからない部分に関しては、A と同様に予測しながら創作する必要があった。実際に学生が選んだのは、「あんパンマン体操」、「ポケモン音頭」などのアニメに基くもの、「だんご3兄弟」、「とんがり体操」などの幼児向け教育番組で放映されているもの、「慎吾ママ」、「モーニング娘」などの子どもに人気のある歌手・タレントが踊っているものであった。また B と同様に衣装や小道具の工夫を行い、グループの個性を反映し、観せる楽しみが得られるようにした。これもクラス内で発表会を行い、他クラス分は VTR で鑑賞をした。

### ④ 人前に立つ抵抗感を払拭する

一般的な学生に比べると、ある程度の心

構えや覚悟があるため、人の前に立つことができる方だとは思われるが、始めはやはり、自分から前に出られる学生は数少ない。過去に、「いい子ぶっている」「はりきっている」「生意気」などと言われた経験を持つ学生も少なくない。この仲間、このグループの中では意見を言っても大丈夫という確信が得られないと、（能力に関係なく）人の前に立つことを嫌がる傾向にあると感じている。「皆の前ではできないが、子どもの前ならできる」と言う学生が何人もいることが、これを裏付けていると思われる。

そこで、「体育実技」では第6回目から準備運動の指導、「幼児体育」では第6回目から表現運動の指導を実践し、人の前に立って人を動かす訓練を行った。準備運動はグループで案を作成し、担当パートを一人で指導した。表現運動は2人組で案を作成し、ピアノ伴奏と指導を交互に行った。これに関しては、各学生毎に優れている点、課題点、努力がみられる点などを講評し、各学生の意識の向上が得られるよう、そして人の前に立って人を動かすこと

ができるようにならなければならないという、周囲の認識が得られることを目指した。

## （2）技術から創造性重視へ

過去2年間は、個人の技術のある程度高めてから（エアロビやジャズの要素を加えたダンスを覚え、運動量の確保と動き方の技術の習得を目指した。これは試験を課した。）、そして表現しやすい環境を整えてから創作へ移行させていたが、経験による差が大きく、週1回の授業の中で身につく技術は多くない。又、他の場面での応用も予想以下であったため、より現場で求められる、工夫をしたり創作する力を高めることを重視し、各作品を踊る中で動き方の指導を加えることにした。

2年生時にどのような差がでるかは今後の課題であるが、一年生の現時点では、創作力、工夫する力が以前の学生に比べて向上していると感じられる。

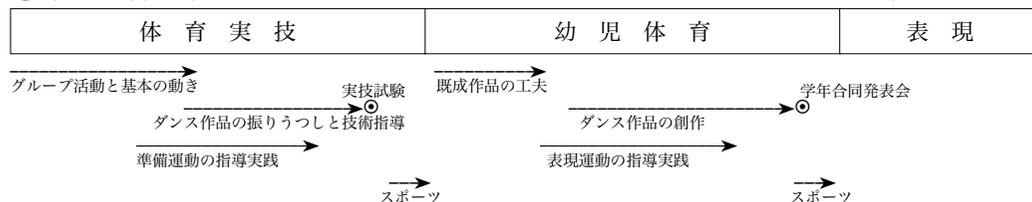
以下は、授業の流れを図式化したものである。

### ① 平成12年度1年生



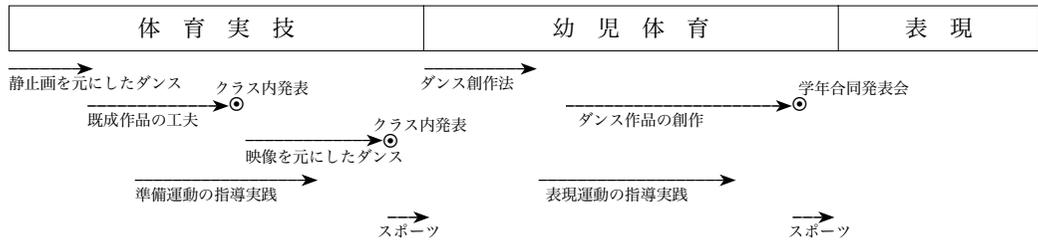
### ② 平成13年度1年生

2年次



## ③ 平成14年度1年生

2年次



## (3) 他教科との連携

昨年度、人間関係に起因する学生のトラブルが頻発し、グループ活動がスムーズに進まないことが科内で話題となった。そこで、友人関係が固定化する以前にグループ活動を多用して、交友関係の輪を広げることが、カリキュラム、時間割変更の際に一つのポイントとされた。

## ① 入門セミナーの導入

入門セミナーでは、0.5クラスの単位で担任がつき、その中で様々なグループ活動が展開された。詳細は、「入門セミナー実施に関する事例報告」を参照。

## ② 総合演習Ⅰの実施時期の変更

担当者の持ちゴマの関係上、2クラスが1年次春学期、1クラスが秋学期に実施されていたが、講義系科目でのグループ活動を、春学期に行う方が効果的ではないかとのお考えから、今年度は春学期に全クラスの授業を行ってくださった。

## ③ 欠席者への対応

人間関係のトラブルや学生個人の不適応に迅速に対応するために、今年度は学科長より、理由なく2回連続で欠席した学生に対して、教員間で連携を図り、家庭に連絡をするよう指示された。

以上が今年度の変更点であるが、休学・退学者の減少、仲良しグループ以外のクラスメイトの動向をつかんでいるなど、昨年度に比べると友人関係の幅が広がったように感じられることが少なくない。このことは、「自分を表現する」「自分をさらけ出す」ことの抵抗感の減少に繋がっていると思われる。今後の平成14年度1年生の学年合同ダンス発表会、2年次の「保育内容・表現」を経てどのような差が現れるのか、後日、継続報告したいと思う。